

■特別寄稿

旧制高等学校のスポーツ活動研究

—練習日誌『南下軍』からみた四高柔道部の修道院化—

大久保 英哲¹⁾

抄 録

本研究は、旧制高等学校の活動形態やスポーツマインドが具体的にはどのような過程で形成されていったのかを、大正3（1914）年から昭和21（1946）年までの分が残されている旧制第四高等学校柔道部の練習日誌『南下軍』の記述をもとに、「部員たちの意識や行動を丹念にフォローする」なかで明らかにしようとするものである。

まず第1に、四高柔道部が最も過酷な練習を行ったとされる昭和2～3（1927～28）年の練習日誌の内容を分析した結果、寝技主体のきわめて過酷な長時間練習が通年にわたって行われており、作家井上靖の言う「修道院」的柔道部実態が明らかとなった。

第2に、最初の練習日誌である大正3（1914）年の内容を検討した結果、練習は試合の3ヶ月前から開始され、練習時間も1時間と、きわめて常識的合理的な、いわば牧歌的練習が行われていた。

第3に、練習日誌の通年化の開始を検討すると、それは柔道部の全国高専大会敗退と重なる大正11（1922）年からであった。すなわち、修道院化の背景には柔道部の勝利と敗退が関係していると考えられる。

なお、四高柔道部に見られる旧制高等学校の寝技中心の柔道は「高専柔道」と呼ばれ、それまでの立ち技主体の講道館柔道とは異質なものであり、講道館と対立した。これは旧制高等学校が既存のスポーツ組織や文化とは異なった独自のスポーツ文化を作り出したことを意味する。こうした新たなスポーツ創造の観点からも旧制高等学校におけるスポーツ史研究は意義を持っている。

キーワード：旧制高等学校、四高、柔道部、練習日誌、南下軍、井上靖

1) 金沢大学教育学部

■ Japan Journal of Sport Sociology 16 (2008)

Historical Study of the Sports Activity in the former 4th High School, Kanazawa:

The "monastic" judo club life evident from the daily practice log "Nankagun"

OKUBO Hideaki

Abstract

This study is aimed to reveal the specific process through which the activity form and the athletic mind of the old-education-system high schools were formed by "following the consciousness and actions of the club members," based on the descriptions in the daily practice log "Nankagun", parts of which still remain from Taisho 3 (1914) to Showa 21 (1946), of the old-education-system Fourth high school judo club.

First of all, the result of an analysis of the content of the daily practice log of Showa 2 to 3 (1927 to 1928) in which the Fourth high school judo club purportedly performed the harshest of trainings, shows that extremely harsh trainings, particularly those of the ground phase, have been performed for a long period of time throughout the year, and reveals a precise picture of what writer INOUE Yasushi calls a "monastic" judo club.

Secondly, the result of an analysis of the content of Taisho 3 (1914), the starting year of the daily practice log, shows that practices have been fairly sensible and reasonable, or somewhat idyllic, starting from 3 months prior to competition matches and each lasting for 1 hour.

Thirdly, a full-year daily practice log apparently started in Taisho 11 (1922), the year in which the judo club was defeated in the National Kosen Competition. That is, the monasticization seemingly has something to do with the victory and defeat of the judo club.

The judo style of the old-education system high schools seen in the Fourth high school judo club, which emphasizes the ground phase, was called "Kosen Judo," different from the Kodokan Judo which emphasizes the standing phase, and caused rivalry with the Kodokan. This means that the old-education-system high schools have created a unique sports culture different from the existing sports organizations and cultures. The study of sports history of the old-education-system high schools is meaningful also in terms of such new sports creation.

Key words: old-education-system high schools, Fourth High School in Kanazawa, judo club daily practice log, Nankagun, INOUE Yasushi

はじめに

作家井上靖(1907～1986)。昭和2(1927)年、20歳の時に第四高等学校理科甲類に入り、昭和5(1930)年卒業後、九州帝大から京都帝大に入学。やがて新聞記者から作家に転じ、『氷壁』やかずかずの「シルクロード紀行」を発表した文化勲章作家である。その井上は、四高時代柔道に明け暮れて主将まで務めた人であった。『北の海』に描かれているように、井上靖は体格や天分が物をいう立ち技よりも「練習量がすべてを決定する柔道」として寝技を重視し、かつ夢見て、徹底して練習に明け暮れるストイックな生活を自己に課した。「私は高校時代を金沢の沈鬱な気候の中で、徹底的な禁欲生活を送った。柔道部に籍を置いていたので、他の学生が持つような青春を享受するといったゆとりはなかった」と回顧する。「明けても暮れても、私たちは道場で組み合っていた。冬休みも春休みもなかった。夏期休暇だけ何日間か家に帰ることができただけで、あとは柔道ばかりだった。その頃私たちはお互いに言い合ったものである。学問をやりに来たと思うな、われわれは柔道をやりに来たのである、と。」「学校の運動部のあり方やスポーツのあり方について考える時、この私の経験した四高柔道部の部員たちの生活にはいろいろな批判ができるが、しかし私はこれを全面的に否定する気持ちにはなれない。私たちが柔道をやったのは、柔道が強くなりたいためでも、有名な選手になりたいためでもなかった。全く各自が自己に課した一つの青春の日の過ごし方であって、厳しく自分で自分を律した一時期であったのである。その後体験した軍隊生活よりもっと辛かったが、しかし軍隊生活と違うところは、一方が全く権力によって強いられているのに対し、他は自分が自分を律していることであった。その点私たちは道場という一つの修道院にはいったようなものであった」¹⁾。

こうした井上のいう「修道院」的運動部活動は、日本的な武士道の色彩を強く帯びた独特のスポーツ像でもあって、四高柔道部に限るものではなく、わが国の旧制高等学校運動部の個性とも言えるものであろう。

そもそも旧制高等学校の運動部活動は「職員生徒共同融和して智徳を修養し身心を練磨し善良なる校風を発揚するを以て目的」とした校友会の運動部組織として位置付けられ、その活動は、学校内の日常的な活動にとどまらず、やがて対校競技へと発展、中心的な学校行事としても恒例化され、さらには伝統化されて展開されていった。このような旧制高等学校の運動部活動は、一般的なスポーツから見ると独特の性格を持つものに変質し、「単なる個人的な娯楽あるいは修練の域を出て、集団として高校生活を構成する特殊な精神的要素」となり、対校戦は「全校をあげての一種の熱狂的祭典であり、その頂点に立たされる、厳しい練習で鍛え上げられた選手団は、さながらこの祭典に供えられた華やかな犠牲^{いけにえ}であった。明治から大正にかけての時期、昭和に入ってから、その都度応援歌や壮行歌が作られ、年を重ね、回を積むにしたがい、独特の対校戦の雰囲気盛り上げられ、それらに伴う伝統が形成された。そして当の高校だけでなく、学生界一般にも大きな刺激となり、またそれぞれ地元市民の興味と支援を引き起こした」といわれる²⁾。

またこうした旧制高等学校運動部の活動は、「校風刷新の旗手として英雄化され、思想的動揺に対する一種の安全弁と考えられて、為政者や校長の支持を獲得した。しかもその内容は、多分に武士道的気質が加味され、全体主義に置き換えられ、そうした底流の上で浪漫性が発揮された」と総括されている³⁾。

こうした全体主義的傾向や学校側の積極的な支援、武士道的自己没入傾向を特色とする学校運動部のあり方は、高校野球を思い浮かべるまでもなく、現代にも通じる学校スポーツ文化の基層を形成している。

そのような「修道院的運動部」あるいは「武士道的修行スポーツ」の原型を形作った旧制高等学校の活動形態やスポーツマインドが如何に形成されたのかを明らかにすることは、わが国近代スポーツ史研究にとって重要な課題の一つである。それには、旧制高等学校の運動部員達が何を考え、どのような活動を具体的に如何に展開していたのか、その諸相を捉えねばならない。その点、大正3(1914)年から昭和21(1946)年まで、およそ30年分が残されている四高柔道部練習日誌は、それらの記述をもとに「部員たちの意識や行動を丹念にフォローする」⁴⁾ 格好の研究資料である。

そこで本稿では、まず第1に、四高柔道部が最も過酷な練習を行ったとされる昭和2～3年の練習日誌の内容を分析して、井上の言う「修道院」的柔道部の練習や活動実態を明らかにしたい。第2に、最初の練習日誌である大正3年の内容を検討して、初期にはきわめて牧歌的練習が行われていたことを述べたい。第3に、ではいつ頃から練習の過酷度が強化されていったと考えられるのかについて検討を加え、それが柔道部の敗退と重なる大正11年からであると見られることを指摘したい。

1. 柔道部練習日誌『南下軍』

(1) 資料の種類と所在

本研究に使用した練習日誌は『南下軍』(日誌を指す場合にのみ以下『南下軍』と記す)と称され、現在石川県立歴史博物館、一部は第四高等学校記念文化館に所蔵・展示されている⁵⁾。

№1 大正3(1914)年10月～1月
 №2 大正4(1915)年10月～12月
 №3 大正5(1916)年10月～12月
 №4 大正5(1916)年9月～12月
 №5 大正9(1920)年6月～7月
 №6 大正10(1921)年3月～7月
 №7 大正11(1922)年3月～7月
 7月～3月 集金表(準備記)

№8 大正12(1923)年3月～7月

№9 大正13(1924)年10月～3月
(春合宿) 練習日誌のみ

№10 大正14(1925)年9月～翌年7月

№11 大正15(1926)年8月～翌年2月

№12 昭和2(1927)年3月～7月

№13 昭和2(1927)年8月～翌年3月

№14 昭和5(1930)年8月～翌年7月

№15 昭和7(1930)年8月～翌年7月

№16 昭和8(1931)年8月～翌年7月

№17 昭和9(1934)年9月～翌年7月

№18 昭和10(1930)年9月～翌年7月

№19 昭和12(1937)年9月～翌年7月

№20 昭和15(1940)年8月～翌年6月

№21 昭和16(1941)年8月～翌年7月

№22 昭和17(1942)年6月～翌年7月

№23 昭和19(1944)年10月～翌年1月(一部欠損)

筆者は、許可を得てこれらの全冊頁をデジタルカメラで撮影し、パソコン上で映像処理しながら読み進めている最中である。今回用いた日誌は主として、№1、№6、№7、№12、№13である。

(2) 史料批判

さて、歴史研究を行う場合、用いる史料(資料)の当否が検討されねばならない。本研究の場合、特に次の事項が問題となる。

①練習日誌はこれで全部か

残念ながら、柔道部練習日誌がいつからいつまで作成されたのか、また現在保存されているものが全てなのか、つまり廃棄されたり逸失されたものはないのかについては知ることができない。したがって、本研究の見解はあくまでも残されている柔道部練習日誌が全てであるという前提での見解である。

②作為性と検閲

一般に明治期以後の校友会雑誌等を研究資料として扱う場合、教師や学校当局の検閲が加えられ、記事の校正や削除の形で現れることに注

意しなければならない⁶⁾。大正 12 (1923) 年、四高社会思想研究会結成、昭和 3 (1928) 年、運動部・応援団民主化運動に伴って 6 月に盟休事件が発生するなどの状況下、学校当局が日誌を点検していた可能性を完全に否定することはできない。しかし、柔道部が生徒達の自主運営であり、学校当局の指導監督は間接的であったと思われること、そもそも柔道部の練習日誌は部内文書で対外的に公表される性質を持たないこと。記述内容は取り締まり(マネージャー)によるその日の練習記録や個人的感想が大半であり、誤字、脱字、当て字、判読不能な走り書きなどが散見されることも、学校当局の指導の手が加えられていない傍証であるかもしれない。即ち、練習日誌には後に読まれることを意識した作為性や検閲の痕跡は認められないと判断した。

2. 四高柔道部と南下軍

最初に、戸松⁷⁾にもとづき、本稿に係る四高柔道部の概略及び練習日誌の由来にもなっている「南下軍」について述べておきたい。

四高柔道部創設の時期は明確ではないが、開学と殆ど同時であったと考えられている。第四高等学校の運動部を統括する北辰会は明治 28 (1895) 年 2 月に設立されたが、柔道部剣道部は当初含まれていない。明治 32 (1899) 年 10 月に北辰会と医学部十全会が統一して結成された「校友会」にはその名が見えている。

●第 1 回南下軍

第四高等学校の運動部活動は「南下軍」と呼ばれる対外試合を軸に行われた。これは金沢という北の都から南の都京都(三高)に遠征することにちなんでいる。このことには当然ながら、情報・交通手段の近代化が伴っていた。たとえば明治 31 (1898) 年に北陸線が金沢まで部分開通したこともあって、明治 34 (1901) 年には第四高等学校の野球、剣道、柔道、部 50 名が三高との対校戦、すなわち第一回「南下戦」

を開始した。

●第 2 回南下軍

第 2 回は明治 40 (1907) 年であった。第 1 回南下軍は、「運動部の活性化」を目的に掲げていたのに対し、第 2 回目は「第 1 に強健なる学風の養成、第 2 に生徒の一致団結、第 3 に三高との交情を深めること」とされ、野球、庭球、剣道、柔道、のほか応援団 125 名が加わり、総勢 200 人の南下隊が結成された。三高のほか六高も参加し四高が優勝している。柔道部歌「流水遠く」が作成されたのもこの頃とされている。以後「南下」は四高の対外試合全般を象徴する用語となっている。

明治 27 (1894) 年 講道館から師範派遣

明治 44 (1911) 年 溝淵進馬校長指導

大正 2 (1913) 年 9 月、嘉納治五郎が来校し、講道館柔道の指導が行われた。

大正 3 (1914) 年 12 月、第 1 回全国高専柔道大会(京都帝大主催)四・六・七高参加、四高優勝。六高との切磋琢磨が始まった。15 人ずつの対戦であった。

大正 4 (1915) 年 12 月、第 2 回全国高専柔道大会(京都武徳殿)が行われた。参加校 6 校、四高二連覇。四高は崩れ上四方と立ち技から寝技への連絡変化技が優れていた⁷⁾(277 頁)。

大正 5 (1916) 年 大将戦は時間無制限となり、六高大将川地と四高大将駒井の対戦は 1 時間半に及び、引き分け。川地はそれまでに四高の三将副将と戦っているため、1 人で連続して 2 時間以上の試合を行ったことになる。

●以後

大正 9 (1920) 年 8 月(この年から 8 月開催)の第 7 回全国高専柔道大会まで四高は七連覇を遂げた。

大正 10 (1921) 年 7 月 第 8 回全国高専柔道大会 9 校参加 準決勝戦で四高対六高は深夜 2 時まで戦った末引き分けた。この結果、五高が優勝となった。これ以後大将戦も 1 時間に時間制限となった。

大正 11 (1922) 年 7 月、第 9 回全国高専柔

道大会 8 校参加し、四高は初戦で五高に敗退した。六高が優勝し、以後六高 8 連勝を遂げる。昭和 2 (1927) 年 (第 14 回大会)、四高は六高に破れた。

昭和 3 (1928) 年 (第 15 回大会) 四高 40 名の充実した陣容で六高から優勝奪回を図る。だが、準決勝で松山高に破れ、敗退した。

「以後四高における左翼運動は年とともに盛んになり、ストライキさえ起こすに至った。それらの影響で柔道部に在部するものはほとんど無くなってしまった。(中略) 四高柔道の神髄は、事実上この年をもって終わりを告げるにいたった」⁷⁾ (299 頁) とされている。

3. 昭和 2～3 年の練習日誌

最初に、八連覇を逸した大正 10 年以後、敗退を続ける年の中では最も戦力が充実し、優勝奪回の期待が込められたがやはり敗退した昭和 2 (1927) 年～3 年にかけての日誌 (上述 No.12 昭和 2 (1927) 年 3 月～7 月 210 丁 頁番号なし、一部乱丁あり、No.13 昭和 2 (1927) 年 8 月～翌年 3 月 110 丁、頁番号なし) を取り上げる。

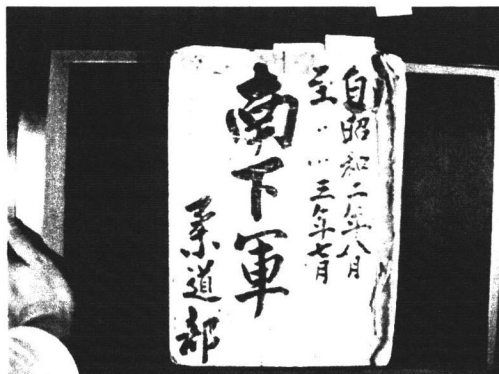


写真 1 昭和 2 年『南下軍』表紙

記述内容は、日付、練習時間、練習内容、来訪者、紅白戦結果、部員の状況、話し合いの内容、決意などが筆書きされている。判読困難な箇所や、当て字、誤字などもしばしば散見される。なお後述する大正 3 年の日誌に大きな比重を

占めていた部員出勤簿はない。筆署名は記されていないが、紅白試合の対戦相手や決まり技、決着時間、練習や試合に関する所感、「本日練習なし」など、部の活動が全般的に比較的細かに記されていることから、複数の取締まりのうち、練習には直接参加しない立場のマネージャーが記録しているのではないかとと思われる。(なお、原文は送りカナであるが、ここではかなにしている。)

以下、分量も多いために、いくつかの項目ごとにその記述を整理してみる。

なお、この時期 (昭和 2 (1927) 年 4 月～昭和 4 年 6 月) には、著名な作家井上靖が四高柔道部員であり、その経験を『北の海』などさまざまな作品に残しており、合わせて考察を加えてみたい。

(1) 四高柔道部の目標

① 全国高専柔道大会

この時期四高柔道部員に共通する目的は全国高専柔道大会 (いわゆるインターハイ) で再び覇権を奪取すること、そのために連覇を続けている六高を破ることであった。大会が近づくにつれ、それは繰り返し確認され、また話し合いも持たれている。

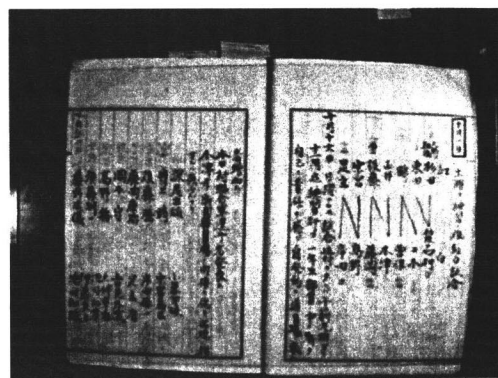


写真 2 昭和 2 年『南下軍』(左頁に井上靖)

「午後五時練習を終える。道場に車座になって話合った。先ず富田、杉田を初めとし三年生全部腹藏なく意見を発表し今迄の方針に誤りがあったことを述べて謝す。石村、鶴等は之に応

答してその謝すの必要なく要するに我等が覇業へ向ふ当然ふむべき道程なりといった。九時頃夕食を執り再び会したり 十一時に至るも話題がつきず 十一時頃解散した要するに部員の自覚を以て柔道を為すに非ざれば南下はいふも更にて柔道を為す意義なんといふことに結末した」(S2.10.28)

「南下もあと三ヶ月足らずとなった各人の南下に対し決心固いものあるは勿論なれども尚この際部員の南下意識づける為に宣誓を行った。心の底にあるものを吐露して偽のない決心の程を示した精神的にある基礎の上に築き上げられた結果こそ南下軍優勝の鍵であろう」(S3.4.26)

「南下出陣愈々一週間の近きに迫る此の際にあたりて各人の最善の自重、自愛は最も重大なることにして吾々の身体は吾々のものではない。南下の為に凡てを奉けたるものなれば南下のための最善のコンディションを築くために如何なる苦痛も凌ぎ自愛を要する時なり」(S3.7.5)

昭和2年10月28日分は、それまでの柔道部の活動方針について部活動の幹部3年生が前日の大会の反省も込め、約5時間にわたって行った話し合いの様子が書かれたものである。

昭和3年4月26日分は南下3ヶ月前に行った南下宣誓式の様子である。昭和3年7月5日には自分たちの体は南下のためにあるとさえ書かれてある。井上も同様に「全く、インターハイで優勝することだけが目的の柔道だったのである」¹⁾(512頁)と述べている。また大会が近づくにつれ、日誌の記述量自体が増加していることも指摘しておきたい。1年間の日誌の半分以上が4月から7月の試合期に書かれている。試合が近づくにつれて「気を養う」「精神的にある基礎」「ファイティングスピリット」など精神的な高揚を示す記述が増加し、また「全員挙って敵に猛襲を浴びせるのみ総攻撃！」(S3.7.14)など部活動全体の士気を高め、部員を鼓舞する記述が数多くみられる。

さらに高専大会優勝は、現役部員だけの悲願

ではなく、卒業生、学校、あるいは市民も巻き込んだ関心事であった。「本日杉田氏仙台より来らる」(S3.5.16)、「本日先輩岡本 大倉 両氏京大より来る」(S3.5.21)、「東京帝大より内藤先輩応援に来る」(S3.5.28)、「浅水 小林先輩を初め東大京大東北大の各先輩多数応援に来られて盛況なり」(S3.5.29)、「東北帝大より河合先輩合宿へ来らる」(S3.6.28)、「池内先輩京都より応援に来られ又尾崎久八先輩京都に行かれる途中吾々の練習振りに見に来らる」(S3.7.3)、「校長 長岡先生 上原理事等見えた 此の日校長先生も道場に見へ試合大いに緊張味を来す」(S3.4.25)、「金沢駅頭に出ずれば多数の応援団及び諸先生、各部署員、市民の熱誠なる見送りを受く」(S3.7.14)など、全国各地の大学から沢山のOB、また校長を先頭に学校関係者も激励に無声堂に訪れている。またそのOBの多くが練習に参加して部活動に緊張感と活気を与えている。高専大会で優勝することが現役部員だけの悲願ではなく、卒業した柔道部OBや学校、さらには金沢という地域を巻き込んだ悲願であったことがうかがえる。

②その他の大会

柔道部の試合はもちろん高専大会だけではなく、その他にも多くの対外試合を行っていた。部内の紅白試合を除いた試合は以下のとおりである。

昭和2年

5.1 新入寮生歓迎試合

5.8 武徳会昇段試合

5.18 明大予科と試合(審判問題で不成立)

6.11 中等連合との試合(記述の内容より、四高勝利と判断)

8.29 石川師範学校、金沢一中との紅白試合(四高勝利)

8.30 石川師範学校を招待し紅白試合(四高勝利)

9.12 金沢一中、石川師範学校と練習試合(四高勝利)

10.22 全校医大十全会主催北信高等専門学

校柔道大会（四高優勝）

10.22 中等学校連合と一年の試合

11.1 対級柔道優勝試合（校内柔道大会）

11.19 一中校内柔道大会（井上ら勝利）

11.20 石川県師範学校と一年生が試合（一年生敗北）

昭和3年

1.22 石川県師範学校にて柔道大会（須藤ら敗北）

1.31 金沢二中にて柔道大会（正井、深尾、井上勝利）

2.4 松任農学校と試合（正井ら成績不良）

2.5 小松中学及県体育協会主催一市四郡武道大会（盛会ならず、宮崎優勝）

2.11 第三十二回柔道大会 出送別対科試合（文科対理科、文科勝利）

4.25 新入部員歓迎試合（新入生対二年生、二年生勝利）石川県師範学校と一年生の試合（引き分け）

5.27 砺波中（富山）にて試合（四高勝利）

6.10 神通中学、砺波中学（富山）と試合（足立ら勝利）

6.25 砺波中学と一年生が試合（一年生勝利）

これらの様々な試合のほとんどが南下の準備のために行われ、ほぼ全てに四高は勝利しているが、昭和3年1月の石川県師範学校との対戦では敗退し、「何の面目ありて南下を云うことが出来ようか こんな状態では六高はおろか三年前の二の舞を演ずるばかりだ。気持がだれて力が無いことを知らずに居た部員に取て一服の清涼剤かも知れず否これを刺激として我々は考るところが無くてはならない。兔に角今日は醜態を如何もなく暴露したこれ以上何もいうことはできない」(S3.1.22) との厳しい反省がなされている。

目標が高専大会優勝である四高柔道部にとって対外試合の経験は不可欠であり、また練習の活性化のためにも必要であったと思われる。また、柔道部が高専大会の次に重要視していた

大会は、「北信柔道大会近づく部員の覚悟又壮にて大花を散らす」(S2.10.10)、「日曜なるも試合近づきたれば午前九時より十一時迄練習を行ふ本日対連合軍選手名発表す」(S2.10.16)、「堅町天狗にて祝勝兼定期コンパを行ふ」(S2.10.22)などの記述から北信越地区の高専柔道大会であったということがわかる。

(2) 柔道部員の活動意欲、練習への参加

練習参加は基本的には個人の判断に委ねられている。そのため、特に1月から3月には、「放課後直ぐに練習始む未だ人数そろわず平凡に練習開始す」(S3.1.9)、「技に於ては相当の域に達しているが元気が足らずとの評であった事実今年になってはどうしたものか部員の元気がない」(S3.1.12)、「本日より寒稽古開始す参加する者僅か五名淋し近頃練習いよいよだれ気味なり（中略）見学者非常に多し各れも理由ありされど脆弱なり」(S3.1.16)、「見学者多し悲観状態なり」(S3.1.18)、「欠席者が目茶に多い情けないことだ特に部の幹部級が一人も出席しないのは何たる醜態ぞ（中略）五人掛をやりうと思ったが人数が少くてやれない加うるに少数の出席者の中にも不遜な語を吐く者が居るに於ては問題にならん」(S3.2.1)、「午前九時より三十分間練習の後解散式を行う 合宿当初にあっては可なり的人数があったけれ共今見ればその半数にも達せぬ色々な事情があったのだろうけれども合宿の後半に至ってにはかに中途にして帰るもの多く特に不都合なのは何等の申し出なく勝手に帰った人の二三あったことである」(S3.3.30)など、の記述も多く見られる。

つまり、見学者、欠席者が多く人数が十分に揃わず活動が停滞している旨の記述も多い。原因として考えられるのは、試合期ではないため部員の意欲が低いこと、冬季で練習環境が悪くケガが多く発生したことなどがあげられる。そのため次のような対策が講じられている。「近頃旧部員の練習がだれて来たその原因はどこにあるか夜三年生集って対策を講じた」

(S3.4.22)。「新入部員歓迎試合を行う出席者総数の半分明日より徹底した狩出しをせねばならぬ」(S 3.4.25)

このように、練習日誌の記述を担当したり、取り締まりに当たっている3年生幹部は部活動意欲も高かったが、試合期以外には下級生や大会に出場することができない非選手の練習参加意欲は必ずしも高くはなかったのではないかと推察される。

(3) 部活動の運営形態

①指導者の有無

練習日誌には柏原俊一と浅水成吉朗という2名の師範が出てくる。柏原俊一は、昭和3年4月～昭和5年3月にかけて京都から指導に来た⁷⁾(296頁)とされるが、部活動に関与しているような記述は少ない。

浅水成吉朗(大正14年12月～昭和6年5月)は大正2年四高を卒業、京都帝大在学中全国高専大会の実現に尽力、大正10年以後に始まった四高柔道部の衰退を挽回すべく、教職の身を熊本県から金沢に移して石川県師範学校の教師となり、柔道部再建に挺身した⁷⁾(154頁)とされる。しかし、「浅水先輩よりの注意ありくれば最初の中は日曜日を休むこととせり」(S2.9.3)、「浅水先輩を初め諸先輩と会合今後三週間の練習に就て計画を立てたり」(S3.6.21)とあるように、幹部が計画している練習や試合に助言や課題を与える程度の関与であったように読み取れる。「練習後富田氏一年生を集めて訓示する所ありたり」(S2.8.30)、「富田杉田両氏特に合宿せられ指導の任に当る感謝の辞なん」(S2.11.25)、「近頃旧部員の練習がだれて来たその原因はどこにあるか 夜三年生集って対策と講じた」(S3.4.22)、「本日練習後二三年生道場控場に集まる今度新たに石村晴雄君に練習一切についての仕切りをやって貰うことに決定した」(S3.4.26)、というように技術指導は主に富田を中心とした上級生が行っていたようだ。特に問題があった日の付近では幹部がその

都度集まり、対策について話し合っていることがわかる。

また学校内の部活動では練習はもちろんのこと、指導もマンネリ化することは避けられない。四高柔道部が練習試合や出稽古を繰り返していることや、「武専より矢野 佐藤兩三段我合宿のた為に京都より来られた だれ気味なりし練習少しでもしめることが出来たならば幸なり」(S3.3.25)、「山口県徳山中学校・山本先生の招待しコーチを受く」(S3.8.20)といったように、外部からのコーチ来訪が歓迎されているのもそのような事情を物語っているように思う。

②柔道大会開催

「四高北辰会柔道部主催北陸関西中等学校柔道大会は来る二十四、五の両日行ふこととなれり」(S2.9.12)、「午後六時より至誠堂に於いて柔道大会歓迎会を開く 当日練習を止めて大会準備を為す」(S2.9.23)とあるように、四高の柔道部は中等学校柔道大会も主催している。柔道の競技に関して準備から当日の運営まで柔道部員総出で組織的に運営していたことが推測できる。このような四高が組織して行った大会には近県も含めた北陸地区の中学や師範学校などが多数参加して盛大に行われており、下級学校に与えた影響は少なくないものと考えられる⁸⁾。

③部律

四高柔道部は高専大会優勝という目標を掲げ、その目標達成のため様々な規制があった。それは部律として示されている。

次に示す記述は昭和2年12月24日、合宿を前にした部律である。

「晚八時より二年生全部一年委員寮娯楽室にて集合し方針を決定す 大体の規約を決す

- 一、練習中は取締に絶対に服従すべし
- 一、見学せんとする者は取締の許可を受くべし
- 一、許可なくして胴衣以外のものに着換ふべからず
- 一、自分より弱き者に挑戦すべからず
- 一、挑戦されたる者は拒絶することを得ず

- 一、見学者は同列に並ぶべからず
- 一、練習の相手は仇討と見よ押込しめ業にて容易に参るべからず
- 一、午後十一時に消灯す午後十時以後は絶対に静肅にすべし
- 一、午前八時頃に起床すべし
- 一、寮規約を守るべし

右の各項に遣う時は取締は細大洩らさず注意することとせり」(S2.12.24)

「合宿方針に関しては大体今の合宿にて決定せるところを不文律にて適用することとなれり特に注意すべき点として左の如き規約を作った

- 一、見学せんとする時及び練習中胴衣以外のものに着換ふる時には取締りの許可要すべし
- 一、酒喫煙は遠慮すべし

一、午後九時以後は外出禁ず十時以後は静肅にすべし十一時に消灯す 以上」(S3.3.9)

日誌を見る限り、合宿毎にこのように方針を立てあるいは確認し、活動を統制していたようである。練習に対する心構えが多く見学や服装について、部員の練習態度をかなり細かなところまで規制している。

以上のように四高柔道部は部員の自主運営であり、参加不参加は自由であったが、その分練習中の緊張感を保持するために「取締」と呼ばれる幹部を中心として部律を細かく決める必要があったのであろう。指導者として、浅水の名が見えるが、石川県師範学校の教員であるために、指導は十分でなかったようだ。本格的な指導者不在のため、部員にかなりの負担がかかっていたことは間違いないであろう。富田は「四高だけはいくら学校当局を説得しても聞いて貰えず講師扱い、だから優秀な師範は来ない。師範難。これも四高転落の一因とも考えられる」⁹⁾と当時を振り返っている。

(4) 練習内容

①練習内容とその変化

四高柔道部及び高専柔道の寝技技術に関して

は徳田の研究^{10) 11)}がある。体格が未完成で小さく、初心者の多かった高等学校生が最も技を習得しやすく、また体格や経験差を克服するための方法、あるいは引き分けに持ち込む技として工夫されたのが寝技であった。

昭和2年4月1日から昭和3年8月までの練習日誌には合計832の練習対戦結果が記されている。このうち、決まり技が付されているのは426ある。この426の決まり技で最も多いのは「崩れ上四方」(118回、28%)であり、次いで「締め」(50回、12%)、「送り襟締め」、「立て四方固め」等である。立ち技は合計しても20回(5%)に過ぎず、圧倒的に寝技が多用されていることがわかる。「新部員十数名を集めて練習後寝業の概念を説明したそれがため旧部員の練習時間が非常にさかれた」(S2.4.18)とあり、新入生にもこうした寝技の重要性が説明されている。もっとも初心者にはこうした寝技中心の長時間練習は過酷であったらしく、「新入部員中五六人を除いて外は一学期の間は立業を主としてやる方針をとることとなった。なお一年生は一時間足らずで皆帰すこととする」(S3.4.17)との配慮も見られる。

練習内容としては「体操」「返し方の研究」「乱取」「紅白試合」「個人試合」「掛け勝負」「三本勝負稽古」「立ち技試合」「ゴシゴシ」「飛行機」「一本勝負」がでてくる。

この中で特徴的な四高柔道部の練習は「飛行機」と「ゴシゴシ」である。「飛行機」は四高柔道部で最も過酷なもので、その内容は一人が次々と相手を変え、「落ちる」(失神する)即ち「墜落する」まで試合をするということから名付けられと思われる荒稽古である。例えば、昭和2年5月31日には「飛行機七台飛ぶ」という記述が見られ、七人の選手が「飛行機」を行っている。そのうちの正井は一人で20人を相手に、2時間を越えた練習を行っている。また昭和2年11月23日には「乱取りかたはら二木飛行機を行ふ。元気なること驚く。試合時間五分。一時間五分にて墜落す。鶴締められて落

ちること五秒」とあり、二木が13人に対して9勝2敗2分（決まり技は締め5、送襟締め1、三角締め1、押え込2、崩上四方固め1とあるが、なぜか合計は勝敗数と一致しない）の後、4人目の鶴に開始後4分で締められ、失神したことが記されている。

また「押込入り方攻め方守り方ゴシゴシ業の練習には所謂組の上に引き出して方法を執る」（S3.3.12）、「乱取押込ゴシゴシ一年練習ゴシゴシ」（S3.5.4）とあるように、「ゴシゴシ」とは相手を寝技に引き込む「引込み返し」の要領を習得するための基本的な寝技練習の一つであった。

一日の練習の流れについては、昭和2年9月1日の記述を見よう。「体操を行ひ次に十五分間二人づつ組んで返し方の研究を行ひ後乱取を為す従来は乱取を為した後業の研究を為せり」とあり、この記述から判断すれば、体操→引き込み返し→乱取→紅白試合やその他の勝負稽古、が普段の練習の流れである。この練習内容は「本日試験ある一同道場に集り合宿の打ち合わせを為す」（S2.12.24）、「午後三時より練習す今度の合宿は大体に於て三段に分けてへたばらす筈なり（十四日より十六日 二十日より二十二日 二十七日より二十九日）明日より午前午後二回練習するが三日目に一回位午後を休み休養せしむる予定他」（S3.3.11）、「疲労気味なり向う数日間の予定でピッチを下げる」（S2.6.12）など、状況に応じて工夫されている。

②練習日程

通常の練習開始時間は午前の場合9時ないし10時、午後の場合2時ないし3時からの練習が大半であった。合宿練習は主に4月から7月の高専大会前の夏期休暇や冬期休暇、春期休暇に集中して行われている。合宿の日程、期間は下記の通りである。

夏季合宿 11日間（S2.8.20～8.30）

冬季合宿 6日間（S2.12.25～12.30）

春季合宿 17日間（S3.3.14～3.30）

練習日誌が合宿によって区切られ、合宿ごと

に部律や方針が確認されていることなどから、合宿が重視されていたことがわかる。合宿練習は昼と夜、1回の練習も3時間以上の長時間にわたることもしばしばであり、合宿は辛く厳しいものであったらしい。昭和2年の冬季合宿最終日には次のような記述がある。

「午後約十分の練習をした後合宿解散式を道場に於て行ふ思はば過去一週間この畳の上で血の出るような苦しみを体験をした或者是夜眠れず夢にまで練習を見る午前午後共に乱取のみ行つから僅か一週間だったけれども疲労の程度は大きかった」（S2.12.30）

また、合宿以外にも以下のような強化練習が行われていた。

寒稽古（S3.1.16から、終わりは不明）

耐久猛練習（S3.6.2からS3.6.15までの15日間）6月の耐久猛練習は、南下直前、盟休事件によって練習が中断された代わりに実施したもので、「道場内殺気現る」（S3.6.2）など猛練習ぶりが窺われる。

なお、このような猛練習、ことに飛行機といった寝技主体の過酷な長時間練習が行われた理由について述べておきたい。これは高専柔道大会の試合形式にその一因がある。高専大会は学校の名誉をかけた対抗戦で、15人の勝ち抜き方式であった。そのため、理論上15人勝ち抜くことができる持久力と技が求められた。しかも試合時間は大将戦は1時間もしくは無制限であったから、ふだんからそれに備えた長時間耐久練習が行われたものと考えられる。また非力なものでも引き分けに持ち込めば、確実に味方に貢献できるために、容易にギブアップしない頑張りや寝技の工夫がこうした長時間練習を生み出したものと考えられる。

③入部・退部行動について

練習日誌に見られる入部勧誘活動は大きく四高に入学する前の中学生に対するものと入学後の勧誘に分けられる。中学生に対しては、「北柴田曾根藤岡四名居残って勧誘文五千枚を全国中学校に発送す（二千枚宛）」（S2.10.31）、「高

岡中学の豊本を勧誘に北出かける」(S3.1.24)などがある。富田は当時の勧誘のことを「入部勧誘の強引な出張作戦」と学生時代の思い出の一つとして取り上げている⁹⁾(154頁)。また新入生に対しては、「応援団の新学期勧誘に関して柔道部は今年の方法に対し異議を称ふることと決定せり」(S2.10.10)、「応援団が葉書を出す時各部の紹介状を封入することになりこれ最も合理的にして部員が意識して部に入るためなり」(S2.11.26)とあるように、学校全体の勧誘活動を応援団が統括していた様子がうかがえる。また全国的な知名度の高さから四高を目指して練習を訪れる例も見られる。「小井川君とは青森県八戸中学柔道部員にて明年四高に入学せんとする人にて練習のため来沢中人なり」(S2.8.23)の記述である。

退部者については2点の記述しか見られない。いずれも除名処分に関する記述である。「池田知幸 池田知雄の未だにふらふらなり石村 北 相はかりて本日除名す彼等二人は腐り物なり 道場の空気をこわすこと甚大なり」(S3.1.18)、「練習後二三年と先輩と道場に会して部員淘汰の件に就き議する所あり其結果左の五名の者を除名する所となり直ちに左の形式を取て道場内に発表し四五日盟休の形勢を見て之が静りし頃に控所に発表し生徒一般に報ずることに決す 吉田高明、小暮芳雄、岡本守、吉見外武、伊藤良三 右の者除名す 昭和三年六月十五日 柔道部」(S3.6.15)

池田知幸、池田知雄は2名とも紅白試合や、掛け勝負にもほとんど参加している様子が見られず、部活動には実質的に参加していなかったのではないかと思われるが、後者の5人について、上田¹²⁾は「除名の時期と言い、公表の用意から言ってスト関係者が含まれている可能性が高い」と述べている。実際に、小暮以下4人は『南下軍』中に頻りに名前が出てくるなど、練習には積極的に参加していた。

④学業と柔道

a. 学業

学業についての記述はきわめて少ないが、試験を不安視する記述はいくつか見られる。しかし、それは試験への不安ではなく、試験が練習に及ぼす悪影響についての不安である。例えば「明日より最も練習に害のある試験が始まる南下を句余の目前にひかえ試験も何もない全員の健闘を南下ためだ試験のために南下を妨げにしてなるものか試験中も二、三年生は練習続行時間は三十分及至一時間とす皆元気なり」(S2.6.24)。前述のように井上靖は「柔道部へは行って二、三日した時、一年上級のTという選手から、君たちは四高へ学問をやりよきたと思うな、柔道をやりよきたと思えというような訓戒を与えられた。(中略)毎日、練習、練習で練習が終ると、勉強するようなエネルギーは残されていなかった」¹¹⁾と書いている。

柔道部員にとって学問をするための時間の確保は必ずしも充分ではなかった可能性がある。もっとも大学への進学をほぼ保障された旧制高等学校の生徒達にとっては、そのような学業よりは課外活動などへの傾斜の方がはるかに重要であったのであろう。

b. 柔道部とストライキ

学校と柔道部の関係について『南下軍』中で最も多く記述されているのは、四高学生運動の中で最大であった昭和3(1928)年6月の盟休事件についてである。昭和3年四高社会科学研究会は運動部の選手制度、応援団の強制参加を批判し、応援は自発的意志によるべきだと訴え、北辰会代議員会で応援団廃止が決議された。これに対して組織的応援団の必要性を強調した運動部は新たに応援団結成を学校当局に求め、許可された。また北辰会も新たに「新興応援団」を決め、準備委員会を発足させた。この2つの応援団をめぐって対立が生じ、北辰会総務委員が殴打されるという暴力事件が生じた。これに憤慨した文科3年生がこの真相究明や有志応援団を認めた生徒監の追求などを求めて、6月11日校内で非合法の学生大会を行った。これに対して生徒監はただちに解散命令を

発し、混乱状態に陥った。学校側は無期停学5名、謹慎10名の処分を発し、これに対し学生側は処分取り消し、北辰会の自由獲得、生徒監の辞職勧告を求めて、6月12日からストライキに突入した。学生側の要求は通らなかったが、学校側も新たな処分は行わないという、卒業生等の調停によってこのストライキは19日に収拾された。なお、この年6月から7月にかけて山口高校、水戸高校などでもストライキが組織されており、こうした動きは全国的なものであった^{13)、14)、15)}。

このストライキに対して柔道部がどのように関わっていたのか、順を追ってみたい。

「最近校内に起れる不祥事件並に生徒大会結果文科一、二、三年其他理科の一部は今日より盟休するに到り南下戦も一ヶ月に迫れる吾部に精神的に影響する所大なり此に吾部としては絶対中立を保つことに決す(中略)浅水先輩より御訓示あり此際吾々部員は学校内の不穏行動に決して関らず南下戦に一意専心邁進す可き事を声明す(中略)三年選手一同の三年間の超人的努力の今一步にして報せられんとする今日こそと実に実に四高柔道部再び天下に覇を称へ山陽の雄六高を服するか否かのけじ目の時である吾々は力強い先輩の擁護の下只一途南下の優勝を期すのみ」(S3.6.12)

『南下軍』の記述からは、部内の動揺を防ぐべく、即日この事件に対して中立を保つ柔道部の態度を部員に示し、また自分たちの目標を再確認し部の士気の低下を防ごうとしている様子が書かれている。続く13日には「部としての断固たる態度を決し以て最重要なる此の際の練習上に学校事件の影響の及ぶことを防んとす依って次の声明を学校に提出し認可し受けて之を至誠堂前に発表す

声明 積年の怨を果す可き南下戦を目前に控えて一意専心練習に没頭を要する時部員の今回の事件に係するは部精神統一上動揺を来す憂あり依て此処に我が部は盟休事件に係ぜざる事を声明す

此の声明書発表後全部員道場に集合し右声明書を果すために部員の下宿に四五名づつ分れて合宿する事に決す」(S3.6.13)

と、声明文により、四高全体に自分たちの立場を明らかにした。同14日には「東京京都両四柔会に此際に於ける吾部の態度状況を報告す」(S3.6.14)と記述され、OB会である四柔会に対してこの事態を報告している。この盟休事件が柔道部に与えた影響の大きさがしのばれよう。

盟休事件によって練習に制約を受け、試合前に計画されていた耐久猛練習も中断せざるを得なかったが、事件中練習は短いながらも行われ、南下の準備が最優先されていた。さらに事件により試験が延期されたことを利用して、17日から合宿を行って次のように南下に備えた。

「盟休事件のため一学期試験は九月十日以後に延びたる事をきき部員一同大いに元気付き愈々専只力を南下に傾注し尽す事を得ることとなり部としては反って幸いとなる(中略)一同道場に集合して今後の策を議し其の結果明日より部員全部一ヶ所に合宿することとなり直に手分けして合宿所探しに行き明午後三時全部員を道場に集め其の決定報告し明日中に全部合宿することに決定す(中略)我々は学校内の紛糾事件の為に練習は大いに邪魔された然し愈々試験は延びた吾々は明日を期して合宿するそして今までの不足の練習を補うと共に今一步頑張って金城湯池の陣を築き今年の関が原の勝負に於て完全に覇権を彼奴より奪取せん」(S3.6.17)

c. 六高との共属・ライバル意識

他校との交流の視点から『南下軍』を見たときに最も注目すべき出来事は昭和3年1月15日に六高生が時習寮を訪ねてきたことであろう。

「六高寮委員三名時習寮へ見学に来る三名の中淵上克己君は六高柔道部の中堅 我等の好敵である在寮柔道部員一同は歓迎コンパに出席した会談中柔道に係したことが沢山出た六高柔道部内では松山如何に盛となるも最後の敵は四高

であり彼等が上洛の目標は何時も四高であるとのことである三年前四高がどん底になった時六高選手は我事のように悲しんだとの事であるこれに反して今吾等が生活は果て彼等が期待を裏切らないであらうか自重しなければならぬ必ず破らねばならぬ我等が今彼等を破る能はざれば両校の長い立派な柔道の歴史も遂に花を結ばぬであろう」(S3.1.15)

当時四高にとって六高とは倒さなければならぬ宿敵である。六高寮委員が時習寮にまで見学に来るということから両校は交流が深く四高、六高柔道部同士も相手校を尊重し切磋琢磨していた様子が「四高がどん底になった時六高選手は我事のように悲しんだ」という一文からうかがえる。また、富田⁹⁾によれば、東京の四高柔道部OBに会いに行った際に六高柔道部の先輩とも共に食事をとったという。旧制高等学校には柔道部という枠を超えた共属・ライバル意識に基づいたつながりがあったことが分かる。

d. 娯楽活動・コンパ

四高柔道部は生徒の自主的運営に任され、厳しい練習が繰り返されていたが、同時に娯楽活動やコンパもしばしば行われている。「部員一同の気分融合を目的とし練習の後、犀川大橋を桜橋方面に散策」(S3.9.10)、「新入生歓迎、部員の休息の意味をもって別所に教員も一緒にたけのこめしを食べに行く」(S3.4.28)などである。またコンパは「堅町天狗」において定期コンパが年に2回、その他歓迎会や送別会が数回行われている。当時のコンパについて井上は「コンパの酒は一年に二回くらいあったかな。あの頃は天狗でコンパやるからまぐさ(野菜のこと:大久保)持って来いといわれて行って肉を食べましてね。そのときは必ず吐いていたものです。」¹⁶⁾と語っている。

(5) 昭和2～3年の『南下軍』まとめ

昭和2～3年の『南下軍』からは次の点を読み取ることができる。

1. 目標は高専大会の優勝であり、学校当局や卒業生からの熱烈な激励や叱咤が加えられている。

2. 部の練習は大会に規定されており、そのため大会に出場しない非選手部員の欠席は多い。また試合期ではない1月から3月の間は欠席者や見学者が多く活動は停滞している。また脱落者もみられる。

3. 師範はいるが、部の運営は部員主体である。部員が「自分より弱き者に挑戦すべからず」「挑戦された者は拒絶することを得ず」「練習の相手は仇討と見よ押込しめ業にて容易に参るべからず」など細かく決められ、上級生の「取締」を中心その規律維持にあたっている。

4. 四高全体が盟休で混乱するも、柔道部は中立を宣言、南下の目標を再確認することによって部内の動揺を防いでいる。

5. 練習は通常は授業終了後午後3時ころから約2時間、夏・冬・春の休暇時には午前・午後、各3時間に及ぶ合宿練習を行っている。極めて実戦的でかつ苛酷である。寝技を多用する「ごしごし」、ひとりが時に2時間を超す「五人掛」「飛行機」といった厳しい練習を課していた。こうした長時間耐久練習は高専大会の試合方式に由来するものと考えられる。

6. 中学生対象の大会を主催したり、有望な選手を各地にスカウトに行くなど部員の勧誘に力が入れられていた。

7. 試験前に練習時間を減らすなど学業にも配慮した活動がなされているが、それは必ずしも充分とはいえない。

8. 疲労やけが人がみられる場合には、練習量の軽減が行われたり、年に数度レクリエーション活動、定期コンパを取り入れ、部員の英気を養い結束を高めようとする工夫が見られる。

なお、昭和2年、3年とも高専大会は途中で敗退した。練習日誌最後の頁には「七月十八日之日不可忘 四高惨敗 吾に忘れ不可る歴史を残しぬ。嗚呼、吾軍優勝の夢遂に又成らず。七年間の臥薪嘗胆の後に於ける之の結果の余り

にも惨めなる哉」(S3.7.18)と綴られている。

このように昭和2～3年の『南下軍』からは、高専大会の優勝に目標を置き、有望選手獲得に努力し、日々厳しい練習を重ね、それに耐えうるものだけが初めて評価を受ける四高柔道部の様子が描かれている。普段から選手中心の試合形式の猛練習を繰り返すことによって、けが人が多かったり、脱落していく者をそのままにしておくことは今日の価値観で言えば健全な部活動の運営とは言えないだろう。また盟休事件で学校が動揺している時も彼らはひたすら柔道をやり続けた。こうした方針は3年生が約5時間もの話し合いの末に達した自覚的なものであった。

前述した井上靖の回顧に見えるように、柔道部の生活は確かに厳しいものであり、その意味で「修道院」的であったことは間違いない。だが練習日誌を見る限り、「柔道が強くなりたいためでも、有名な選手になりたいためでもなかった」という言葉を「勝敗にこだわらなかった」と解することはできない。インターハイに優勝することが悲願の目標なのであり、井上の回顧は後年の文学的昇華を経た表現ではなからうか。

いずれにしても昭和初期、四高柔道部の練習は、高専大会の敗退によっていっそう修道院的に自己目的化され、また苛酷の度合いを強めていったように思える。

4. 大正3(1914)年の練習日誌

さて、四高柔道部において、昭和初期のこのような修道院の練習が最初から行われていたわけではない。残されている最初の練習日誌である大正3年『南下軍』を検討してみよう。表紙、裏表紙を含めて全99頁(頁番号なし)からなる。開始日は10月20日、最終日は翌年1月1日、3ヶ月間の比較的簡単な記録である。

(1) 部員名簿・住まい(27名)

最初に「選手候補者」の名称で、部員名簿がついている。北寮(駒井・大後・桜井・阿部(下線は抹消されている者:筆者))4名、南寮(菱沼・吉川・伊地知・中村)4名、中寮(松岡)1名、時習寮(河合・村澤)2名と寮住まいが11名であり、下宿住まいが(大津・森長・横山・山中・大澤・金山・鈴木・大塚・唐生・木村)と10名、また自宅生(近・岩田)が2名、記入なし(佐藤・細・橋爪・中島)が4名である。全部で27名であるが、「抹消」すなわち何らかの理由で退部したとみられる者が6名おり、それらを差引くと19名である。また、住まいが記されている23名のうち、自宅生は2名だけで、ほかはおよそ半数が寮住まい、半数が下宿住まいである。

(2) 部律

次に示されるのが部律である。

「稽古

午後三時より約一時間

土曜日は午後一時より

日曜日は当分休

但右は南下確定まで

一. 養生

禁酒

暴食を禁ず

禁煙

他の運動及身体を劣する娯楽を厳禁す

但日曜は多少の運動娯楽を許す」

即ち、練習は毎日1時間、日曜日は休み、生活に対する規制もさほど厳格なものではない。

(3) 出勤簿(出席簿)

次に出てくるのが出席簿である。出席日にはマネージャーのものと思われる印が押されている。なお、練習は10月が7回、11月が24回、12月が11回である。

大津武政の例をあげよう。

大津武政

10月(19,20,22,23,24日) 5回

11月(5,6,7,9,10,11,12,13,16,17,18,19(見学)20-29日)22回

12月(1-11日) 11回

さらに大津武政の欄外には次のような特記事項が書かれている。

「10月25日より29日に至るまで5日間我が柔道部の使者として重大任務を帯び京都に行く」

「我が柔道部と三高柔道部との交渉顛末を北辰会役員に説明のため練習休む」

「風邪の為欠勤」(11月2日、11月13日)

(4) 稽古日誌

それでは以下「稽古日誌」という項目で始まる練習日誌の内容を見ていく。

「稽古日誌

我部は老度南下軍の驍頭に洛陽の地を蹂躪して愉安の夢にのみ耽れる都人士を戦慄せしめて以来久しく再び其充実したる力を天下に示す機会を得ず千鈞の弩は徒に張られたのである。恰もよし来る十二月を期し京大主催各高等学校優勝試合有らしの噂伝りぬ。鬱勃たる我部の雄心禁ずる能はず、無為に苦しみし健兒の靈腕は為に涌った。嗚呼洛陽の地、覇者の活舞台に於いて吾人が静に無声堂裡に鍛え来たりし腕前を發揮して北辰の光芒を天下に輝す時来り。思へば愉快、即ち我部は二十五名の選手候補者を選びて猛烈なる練習を開始す。」

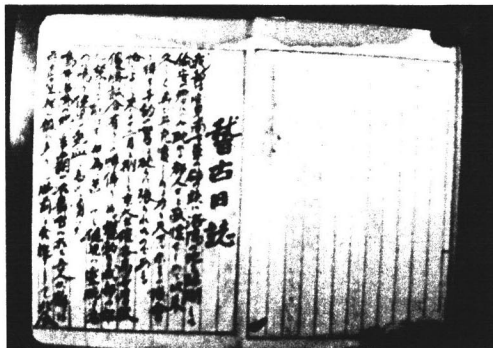


写真3 大正3年『南下軍』稽古日誌

以下、若干簡略化して記す。

10.20 稽古猛烈を極め無声堂は活気溢る。一二中より多数練習に来る。負傷者数名を出す。

10.21 三高生五百余名修学旅行の為当地に来る。練習を休み遠来の客を犒う。

10.22 稽古猛獳。一、二中生練習に来る。

10.23 稽古猛獳。一、二中生来る。

10.24 日曜日、稽古休

10.25 稽古猛烈。中村眼瞼を負傷す。

10.26 運動会、稽古休

10.27 慰労休

10.28 欠席者九名の多きを数ふ、遺憾千万。

10.29 練習倦怠の色あり、連日の疲れによるのであろう。

10.30 「大日本武徳武術専門学校生徒修学旅行に来沢。我部は有段者五名、二段大津、同駒井、初段森、同大後、同桜井を武徳殿に派して彼と戦ふ。彼は三段を大将とし、四名の二段を以て我に向ふ。観客溢れし武徳殿立錫の余地すらなし。誠に金澤柔道界未聞の壯観あり、桜井、大後、森よく奮闘するも戦利なく枕を並べて討死にす。次で我部の重鎮駒井、戦友三人まで倒れしを見ては無念やる方なく、勇氣自ずから百倍、敵二段三名を屠りて、大将三段に向う。駒井例の得技を以て屢々敵を窮地に陥れしも遂は彼の為に破らる。次いで大津の出陣。奮戦能く勉めしかども利なく遂に我部の敗となりしは残念の至りなり。此日我軍破れしかども我戦士の勇敢なる戦闘振は能く敵の心胆を寒からしめ、我四高柔道部の為に万丈の意気を挙げしは痛快なり。」

10.31 天長祝日。稽古を休みて聖寿の無窮を祈る。

11.1 日曜、稽古休。

11.2 出席するもの非常に少し。

11.3 我部主催一中対二中紅白勝負を行ふ。稀に見るの好試合、両軍遺憾なく得意の業

- を出して大奮闘する状、実に壯観を極む。
一中大将を残して勝つ。
- 11.4 選手負傷病気の為欠席する者多く、甚だ振はず。
- 11.5 選手紅白勝負を行ふ（十三人 対戦結果省略：大久保）
- 11.6 練習猛烈を欠く。
- 11.7 有段者対無段者稽古を行ふ。（有段者4人が、無段者9人と次々に対戦、破れたら交代、大津は10人、駒井は9人と対戦している：大久保。対戦結果省略）、此日青島陥落、祝勝大コンパを開く。
- 11.8 日曜、稽古休。
- 11.9 練習稍活気を欠く。勇気を鼓舞せんが為に五人抜きを行ふ。
- 11.10 青島陥落、祝勝提灯行列。
- 11.11 元気なし。
- 11.12 出席者多く大元気。寝技一本勝負を行う。（紅白戦：大久保、対戦結果省略）
- 11.13 欠席甚だ多し。
- 11.14 「軍容既に整い、選手は意気愈昂る。此日は当地官県立学校連合軍を迎えて戦ふ。（連合軍は医専、一中、二中、師範25人、四高22人：大久保、対戦結果省略）鎧袖の一触だにも恠せずと予期されし連合軍の奮戦、敵ながら天晴れ。只敵の大將今井初め医専の選手が当日に至り一言の通知もせず欠席せしは吾人其の何の故あるか甚だ解釈に苦しむ所あり。顧みて我軍の奮闘振りを見るに、勝つには勝ったが近く洛陽の陣頭に覇を争はんとするものの成績としては誠に貧弱の誇りを免れず。殊に我軍の中堅が一中久村の為撫で切られ小冠者をして徒に名を成さしめしは返す返すも遺憾の極なり。我柔道部未代までの恥、吾人は有間記せざるべからず、吾人の重任を顧みて、吾人は憤慨せざるべからず、今回の恥を思う時に。」
- 11.15 日曜 稽古休
- 11.16 一昨日の試合に奮起せる選手の練習は元気溢れ革新の気概に漲る。
- 11.17 猛烈を極む。
- 11.18 今日より選手の一本勝負を行ふ。（其成績は表に記せり、之には番外取組の成績のみかくかくしかじか）（対戦結果省略：大久保）
- 11.23 南下確定す（太字）京大より公式案内状来る。本日は新嘗祭なれど、稽古を行ふ。（対戦結果省略：大久保）
- 11.24 久しく不安に襲はれし選手も今や南下確定し、活気俄に加はりしを覚へたり。（対戦結果省略：大久保）
- 11.25 本日より夜間稽古を行ふ。午後六時—八時迄。選手皆出席、愉快。有段者対無段外紅白勝負を行う。（駒井12人対戦、対戦結果省略：大久保）
- 11.26 特筆することなし
- 11.27 時習寮柔道部師範に遠征す。村澤、中村、菱沼の我選手目覚ましき武者振りを見せて彼の大変連中に一泡ふかせしは痛快。
- 11.28 稽古午後三時より始む。雪降る。終りて大コンパを開く。猛犴は飯を喰らい猛犴は豚汁を平らぐ。
- 11.29 稽古甚だ振はず、選手疲労の気味あり
- 11.30～12.2 平凡
- 12.3 在京大、我先輩清水君来らる。熱心に稽古をなして被下れたり。
- 12.4 明治大学武道部選手新免三段、多田二段、吉田初段、武道修業の途、本校訪問、無声堂に於て午後三時より稽古す。終りて歓迎の意を表して茶話会を開く。
- 12.5 稽古例の如し
- 12.6 稽古例の如し
- 12.7 稽古例の如し
- 12.8 選手確定す
大津武敏 駒井重次
初段 森長四郎 大後勝廣 櫻井金吾
ほか10名（省略筆者）

- 補欠 伊知地三郎 ほか4名
マネージャー 山下輝夫 以上
- 12.9～13 試験漸く近くして稽古にも自然其結果表れ稍活気を欠く。蓋し止むを得ざるへし。
- 12.14 最後の稽古日、武徳会に行き、巡查ともと思ふが、悉く投げ飛ばして選手に自信を持たすの一助とす。
- 12.15～16 稽古休む。試験中は試験終了後道場に行き随意に稽古をして(約半時間)別に出席を取らず。
- 12.24 「此日試験終了、雪降り。時習寮生徒諸君の盛大なる送別会に招かれ、前途を祝せらる。午後七時桂月集合、八時尾山神社参拝、武運長久を祈る。寮生通学生諸君の提灯を手にして一隊に附せられて南下の歌を高唱しつつ停車場に向ふ。停車場に於ける光景は実に壯観を極めり。生徒監の訓辞を忝ふし応援隊長の送別の詞を受く、寮代議員は庭球部選手一同より立派なる花環を受けたり。花環は感謝の辞なくとも感涙の流れ出る譬なり。七百の校友はかくの如き熱誠を以て我らを南の方洛陽の陣頭に送る。士は己を知る者の為に死す、我らは死んでも校友のこの多大の期待に背いてはならぬ。午後十一時過ぎ発車。」
- 12.25 「午前八時過ぎ京都着。多数の先輩の出迎えを受け吉田町保養館に入る。午後先輩諸君主催の下に大学集会場にて開かれたる南下軍歓迎会に招かる。終って大学道場にて稽古をなせり。先輩にもお願いせり。」
- 12.26 此日野球部五高と戦ふ。剣道部とともに応援に行く。午後大学道場を借りて稽古をなす。
- 12.27 武徳殿にて稽古。(午前十一時)
- 12.28 同
- 12.2 此日剣道部は大坂高医八高を破りて意気昂る。我部は戦友の目覚ましき活動を見ては只彼らに劣らんざらんと稽古も身が入り勇氣正に七高を呑み六高を呑む、明日は初めての戦い午後九時就寝。此日七高対六高戦ありて七高六高を破れり。参観に行く。
- 12.30 愈戦ふ時が来た。午後一時六高対四高戦開始さる。審判磯貝七段佐村六段、此日天晴れ意気更に昂る。試合の成績左の如し。(15人 対戦結果省略)
- 12.31 「午前九時試合開始対七高戦。審判磯貝七段佐村六段、(15人 対戦結果省略)かくて我部は六七高を倒して優勝せり。其夜は盛大なる祝勝会を開きて牛飲馬食す。午後九時解散。
- 大正4年元旦午前八時金沢駅に凱旋す。(試合の評価と彙報は部報)」
- (5) 戦記 (部報)
- 「一度南下して洛陽の地を蹂躪し愉安の夢にのみ耽れる都人士を戦慄せしめて以来、我が部は沈黙を守ること既に久しく、今や軍容整ひ鬱勃たる雄心禁ざる能わず。戦士脾肉の嗅に堪えざる時、今十一月二十三日、京大柔道部は檄を我に飛ばして第一回各高等学校柔道大会に参加せんことを求め来れり。幾度か伝えられては中止せられ吾人を失望せしむる事久しかりし優勝試合は遂に事実となりて現れ来り。我凶南の宿志を伸ぶる絶好の機は到来しぬ。選手が鉄腕為めに嗚り熱血為めに躍れり。
- 三ヶ月に亘る猛烈なる練習を終へ、凍雨霏々として降る十二月二十四日午後九時軍容堂々愈南下の途に上れり。我百の校友が口口に浴びせる熱誠奮る奨励と囑望の言葉は、深く我等が神靈に触れて選手が面影決死の色を帯べり。
- 翌二十五日午前八時京都着。懐しき多数の先輩諸君に迎へられ直に吉田町保養館に入れり。其夜は大学集会所にて開かれたる盛なる南下軍歓迎会に招れたり。二十五日以後、三十日まで五日間は我等は大学道場或は武徳殿に於て練習を続け傍ら野球部、剣道部の応援に過したり。かくて愈我静かに無声堂に於て鍛へし鉄腕

を振ふの日は来れり。

(中略)

七高対四高優勝試合

三十一日午前九時試合開始。審判磯貝七段佐村六段。(中略、双方15人ずつの対戦を行う)

この日の合戦、引き分けを数ふる十有三、必勝を期した同士が命づくの戦闘なれば精気の相うつ所火をも出すかと怪しまれたり。七高軍敗れたりといえども軍容堂々負けて尚其勇の称すべきものあり。我軍大将大津、総長代理磯貝七段より優勝旗を受く。嗚呼名刀一度鞘を払へば紫電一閃必ず血を見る、我一度南下して、洛陽の地は遂に吾人が蹂躪に委し終んぬ。凱歌声裡旗を擁して引上ぐれば、細雨静かに降り出でて戦場を弔うが如し。」

(6) 大正3年『南下軍』のまとめ

大正3年の柔道部の記録から次のことが指摘できる。

1. 部の運営は部員による自主活動であり、学校が指導者を配置していたわけではない。
2. 練習は10月から12月に集中している。(12月冬休に南下遠征試合が組まれたことによる)
3. 練習日、練習時間とも短期、短時間である。
4. 欠席者が比較的多い。また「活気なし」の日も多い。
5. 対外試合決定により意欲が喚起され練習も活性化されている。

このように、四高柔道部が全国高専大会で七連覇を遂げ始める大正3(1914)年の日誌を検討すると、初期には比較的練習時間も短く、一言で言えば、牧歌的、合理的かつ常識的活動内容であったことが指摘できよう。

5. 練習の通年化

大正3年の練習日誌で明らかにしたように、練習は10月から始まり、11月、12月の3ヶ月間に集中している。大会が当初の12月末か

ら、のち大正9年からは8月に移るが、基本的に南下戦3~4ヵ月前からの練習というパターンは大正3年から大正10年までは同様である。

練習日誌の記録から見る限り、練習の通年化が始まるのは大正11年からである。この年の『南下軍』は3月から7月までの『南下軍』と7月から翌3月までの「南下準備記(禁他見)」から構成されているからである。7月21日には「対山高商 第九回南下 惨敗」の文字が見えるが、この「南下準備記(禁他見)」は集金簿やメモ的な記述が多く、残念ながら練習内容を詳細に知ることはできない。

結

昭和2~3年当時の修道院的な四高柔道部とその背景について考えてみよう。当時の柔道部は日常生活の規制から始まり、自分より弱い者への挑戦を誠め、その相手を敵討ちと見なし、安易な「参った」を言わせない厳しい部律に支配されていた。練習は通常2~3時間であり、その中心は旧制高校柔道の特色でもあった寝技主体の練習である。

一般に日本の格闘技は対戦時間が短い。大相撲は4分過ぎて膠着状態が続くと、疲労のために「水入り」となる。柔道は講道館では3~20分間と幅広く規定されているが、国際柔道連盟ルールは5分、剣道も5分が一般的である。四高柔道部の特徴的な練習である「飛行機」の場合、試合時間は5分だが、次々と相手を変えて1時間以上も対戦を繰り返すのであるから、その凄絶さがおわかりいただけよう。高専大会は学校の名誉をかけた対抗戦で、15人の勝ち抜き方式であった。そのため、理論上15人勝ち抜くことができる持久力と技が求められた。しかも試合時間は大将戦は1時間もしくは無制限であったから、ふだんからそれに備えた長時間耐久練習が行われたものと考えられる。また非力なものでも引き分けに持ち込め

ば、確実に味方に貢献できるために、容易にギブアップしない頑張りや寝技の工夫もこうした長時間練習に結びついたりと考えられる。

その象徴が「飛行機」である。従来立ち技が主であった講道館や武徳会の柔道に対して、比較的体格の小さい非力であった高校生たちは、それまで専門家が手を着けようとしなかった寝技に着目して、研究と鍛錬を加え、「高専柔道」と呼ばれる独特の寝技中心の柔道を作り上げた。この寝技中心の柔道は体格や力に頼らない合理的な柔道であるとともに、「練習量がすべてを決定する柔道」であり、勝ち抜き戦という試合形式もあって、「長時間耐久練習」としての「飛行機」を生み出した。

大正12年頃、高専大会で行われた寝技が、講道館に波紋を投げ、これが審判規定の改正の端緒となり、講道館は「試合は立ち技を以て始むべし」の審判規定を採用した¹⁷⁾。これは高専柔道が講道館柔道に対抗する新たな柔道を作り上げ一大勢力となったことを意味し、ために講道館は高専柔道及びその延長上にある帝大系の柔道との軋轢を深めていった。

また、井上靖は「柔道が強くなりたいたためでも、有名な選手になりたいためでもなかった」というが、柔道部としては高専大会に優勝することが悲願であり、それを目標に日夜取り組んでいたことは間違いない。

ただし、四高の柔道部が最初からずうっとこうしたやり方を取ってきたものではないこともすでに見てきたとおりである。最初の練習日誌、大正3年の日誌を読む限り、初期には大会の3ヶ月前から練習が開始され、練習時間もおよそ1～2時間、練習休みも多く、一言で言えば牧歌的練習が行われていた。これは基本的に大正9～10年まで同様である。大正11年からは練習も通年化され、練習内容も過酷化の度合いを強めていく。これは高専大会で大正9年まで七連覇。大正10年に引き分け。大正11年に初めて敗退した大会結果と見事に対応する。

勝敗はいつの時代にも選手たちの最大関心事であり、その結果は練習方針や練習内容を左右する。

昭和2～3年は選手の陣容も整い、覇権奪取への期待がいやがうえにも高まった時であった。しかしながら、この年もやはり夢は破れ、以後四高柔道部は低迷したと評されるのである。

さて柔道における寝技のように、練習量がすべてを決する剣道として、四高をはじめとする旧制高等学校では「二刀」が好まれ、寝技に匹敵する技術的な特徴としては、間合いの外からの飛び込みが盛んであった。非力で素人同然の高校生は、間合いに入ってから技巧を凝らした打ち合いを避け、間合いの外から一気に飛び込んで打ち、そのまま相手の横をダツと駆け抜けていく技が効果的であったからである。また、豪快な飛び込み技が旧制高校生にふさわしかったことにもよるものであろう。またそれに伴って、一本打ってからの「引き上げ」が盛大であった。「引き上げ」は自分の打った一本を強調して相手を萎縮させ、審判を牽制するのが目的である。戦後の試合では見苦しいとして審判から注意されるが、勝つための戦法として、いろいろな引き上げが工夫された¹⁸⁾。

運動部活動としてみた場合、四高柔道部に見られるような練習方法や運営方法には問題が見られることは事実である。だが、現在のスポーツは世界中で統括組織のもとに一元化され、独自のルールや練習方法・内容を自ら創意工夫する余地は急激に減りつつある。そのことはついにはスポーツをやせ細らせる一因になるのではないかと筆者は危惧している。その点からみると、旧制高校のスポーツ活動は、既成のスポーツ概念に囚われない創意工夫に満ちた世界であり、新たなスポーツ活力や文化を創造する立場から見ると実に魅力的であることも事実である。

主な引用・参考文献

- 1) 井上靖 (2001)「青春を賭ける一つの情熱」、石川近代文学全集七、能登印刷出版、512-515 頁
- 2) 高橋佐門 (1974)、旧制高等学校における運動競技について、旧制高等学校史研究1号、20-41 頁
- 3) 岸野雄三・竹之下休藏 (1959)、近代日本学校体育史、東洋館出版、172 頁
- 4) 坂上康博 (2001)、にっぽん野球の系譜学、青弓社、237 頁
- 5) 金沢大学 50 年史編纂室 (1999)、第四高等学校関係資料リスト
- 6) 岸野雄三 (1973)、「体育史」、現代保健体育学大系 2、大修館書店、282-284 頁
- 7) 戸松信康 (1967)「四高柔道部概史」、四高同窓会、四高八十年、268-306 頁
- 8) 北野与一 (1989)、「旧制高等学校運動部の下級中学校運動部に及ぼした影響に関する研究：第四高等学校の場合について」、北陸体育学会紀要 25、31-40 頁
- 9) 富田保次郎 (1967)、大正から昭和へ苦難の柔道部、四高同窓会、四高八十年、154 頁
- 10) 徳田喜平 (1977)、固め技の成立過程に関する考察：四高柔道「南下戦記」の資料に沿って、金沢大学教育学部紀要教育科学編第 26 号、39-51 頁
- 11) 徳田喜平、宮元智 (1985)、柔道固技の発達とその技術構造に関する考察：四高を中心にした高専柔道から、金沢大学教育学部紀要教育科学編第 34 号、207-220 頁
- 12) 上田正行 (1987)『北の海』四高時代から見る、特集井上靖の世界、国文学解釈と鑑賞、昭和 62 年 12 月号、122 頁
- 13) 資料四高学生運動史刊行会 (1981)、資料第四高等学校学生運動史、総合図書、6-36 頁

- 14) 作道好男・江藤武人 (1972)、北の都に秋たけて、第四高等学校史、財界評論新社、111-114 頁
- 15) 加賀秀雄 (1982)、1930 年前後の旧制高等学校における運動部改革運動について、岸野雄三教授退官記念論集体育史の探究、図書印刷、331-351 頁
- 16) 井上外 7 名 (1967)、「四高座談会四」、四高同窓会四高八十年、161 頁
- 17) 戸松信康 (1976)、「高専柔道資料考」、旧制高等学校史研究、第 8 号、62 頁
- 18) 小沢幸正 (1978)、旧制高校剣道と旧制富山高校剣道部、旧制高等学校資料保存会、旧制高等学校史研究、第 16 号、52-57 頁

附記 大久保英哲 (2007)、旧制第四高等学校のスポーツ活動研究 (1) 及び (2)、いずれも金沢大学教育学部紀要、教育科学編、第 56 号を参照のこと。また本研究に際し、三浦一哉 (2003)、四高柔道部日誌『南下軍』の研究、金沢大学教育学部平成 14 年度卒業論文を参考にしている。